

学校法人日本体育大学

日本体育大学社会貢献推進機構 自己点検・評価報告書

(中間評価)

平成 26 年 11 月 26 日

(内容 平成 26 年 4 月～10 月)

日本体育大学社会貢献推進機構
スポーツプロモーション・オフィス

■日本体育大学の概要

| | |
|-------------|-----------------|
| 設置者 | 学校法人 日本体育大学 |
| 理事長 | 松浪 健四郎 |
| 学 長 | 谷釜 了正 |
| 体育学部長 | 具志堅 幸司 |
| 児童スポーツ教育学部長 | 久保 健 |
| 保健医療学部長 | 平沼 憲治 |
| 開設年月 | 昭和 24 年 4 月 |
| 所在地 | 東京都世田谷区深沢 7-1-1 |

■設置学部・学科及びコース並びに入学定員

| 学部 | 学科・コース | 入学定員 | 収容定員 |
|-----------------|------------------------|--------------------|--------|
| 体育学部 | 体育学科 | 620 | 2,480 |
| | 健康学科 | 160 | 640 |
| | 武道学科 | 120 | 480 |
| | 社会体育学科 | 160 | 640 |
| | 合計 | 1,060 | 4,240 |
| 児童スポーツ教育学部 | | | |
| (平成 25 年 4 月開設) | 児童スポーツ教育学科 | | |
| | 児童スポーツ教育コース | 150 | 600 |
| | 幼児教育保育コース | 50 | 200 |
| | 合計 | 200 | 800 |
| | | (平成 26 年 5 月 1 日現在 | 400) |
| 保健医療学部 | 整復医療学科 | 90 | 360 |
| | (平成 26 年 4 月開設) 救急医療学科 | 80 | 320 |
| | 合計 | 170 | 680 |
| | | (平成 26 年 5 月 1 日現在 | 170) |
| 総合計 | | 1,430 | 5,720 |
| | | (平成 26 年 5 月 1 日現在 | 4,810) |

■ 自己点検・評価

| 基準 | テーマ | 区分 | 評価の観点 | | |
|-------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|-------|--|--|
| 健康で豊かな生涯スポーツ社会の構築 | | 建学の精神 | 1 | 建学の精神に基づく取り組みを実施している。 | |
| | | | 2 | 学生・教職員が建学の精神を理解している。 | |
| | | | 3 | 全学をあげて社会貢献活動に取り組んでいる | |
| | | | 4 | 地域の各種団体と連携した取り組みに努めている。 | |
| | | | 5 | 地域課題等の理解を深めるため、FD及びSDに積極的に取り組んでいる。 | |
| | A 両キャンパス周辺地域住民を巻き込んだ健康維持・増進プログラムの推進 | ① 教育 | 1 | 日体大 CSC (Community Sport Coordinator) 養成に向けた取り組みを推進している。 | |
| | | | 2 | 地域課題を理解するとともに、社会に貢献するための教育課程が構築されている。。 | |
| | | | 3 | 各種体育・スポーツ活動の支援を積極的に実施している。 | |
| | | ② 研究 | 1 | 地域住民の体力向上・健康増進に係る研究を推進し、その成果を還元している。 | |
| | | | 2 | 地域が抱える各種の課題抽出に向けて取り組んでいる。 | |
| | | | 3 | 適切な手段を用いて研究成果を発信している。 | |
| | | ③ 社会貢献 | 1 | 「する」、「観る」、「支える(育てる)」の各種の取り組みを質的、量的充実を図って推進している。 | |
| | | | 2 | 公開講座、体験授業を展開している。 | |
| | | | 3 | 安心してスポーツが行える環境整備に努めている。 | |
| | | | 4 | キャンパス周辺住民を巻き込んだ多様な取り組みを展開している。 | |
| | | B 老若男女が積極的に取り組むことのできるスポーツプログラムの構築 | ① 教育 | 1 | 学生ボランティアを積極的に派遣している。 |
| | | | ② 研究 | 1 | 幼年～高年に係る各種のデータ収集に努め、効果的なプログラムの策定につなげている。 |
| | 2 | | | 研究活動の成果を開示するとともに、各種の社会貢献活動に還元している。 | |
| | ③ 社会貢献 | | 1 | 地域課題解決のための活動に積極的に取り組んでいる。 | |
| | | | 2 | 老若男女が参画できる多様なプログラムを展開している。 | |

■ 自己点検・評価

□ 評価基準

健康で豊かな生涯スポーツ社会の構築

〈テーマ 建学の精神〉

評価のための観点

- (1) 建学の精神に基づく取り組みを実施している。
- (2) 学生・教職員が建学の精神を理解している。
- (3) 全学をあげて社会貢献活動に取り組んでいる。
- (4) 地域の各種団体と連携した取り組みに努めている。
- (5) 地域課題等の理解を深めるため、FD 及び SD に積極的に取り組んでいる。

【事実の説明】

- (1) 本学は、建学の精神を「真に豊かな国家・社会を実現するためには、体育・スポーツの普及・発展を積極的に推進し、健全な心身を兼ね備えた全人格的な人間を数多く育成することが肝要である。」と定め、今年度、ヴィジョンの一部改訂を行い、「地域振興をリードする大学を目指す」との文言を加えた。今回、社会貢献事業の中心的な取り組みとして「体力測定」を位置付け、地域との連携の中で体力に関する科学的・学術的解析を踏まえた公開講座により「知」を提供するなどの取り組みを行った。さらに、これに関連し、健康増進を目的としたスポーツ教室を開催するなどして、量的には十分ではないが、建学の精神を踏まえた社会貢献事業を展開している。
- (2) 学生にはライフガイダンスマップ、教職員にはクレドを配布し、これらに建学の精神を記載して趣旨の徹底を図るとともに、常時携帯するよう指導している。さらに、学生は授業の中で、教職員はFD・SDにより建学の精神が周知されている。
- (3) 平成26年4月より、日本体育大学の中に日本体育大学社会貢献推進機構を立ち上げ、各学部長等部局長が同機構の構成員となって活動に取り組んでいる。また、機構内に設置されたスポーツプロモーション・オフィスにおいて、学生の人材バンクの構築を進め、10月29日現在において、237名(体育学部211名、児童スポーツ教育学部26名、保健医療学部0名)が登録し、外部団体等からの依頼に対してタイムリーに対応できるよう体制を整えている。
- (4) 平成26年6月20日付けで、世田谷区、横浜市、公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団、公益財団法人横浜市体育協会と社会貢献事業に係る協定を締結し、各関係団体から構成員を派遣していただき、地域社会連携本部会議を開催するなどして、地域の声を十分に反映させる仕組みを整えつつある。また、以前から、横浜市青葉区他、23の団体等と協定を締結して事業に取り組んでおり、地域との連携は十分に図られている。
- (5) 平成26年度に新たに設置された日本体育大学社会貢献推進機構が主催して、本学の社会貢献活動に関するウォームアップセミナーを平成26年6月18日に世田谷、健志台の両キャンパスにおいて開催し、今後の社会貢献活動の展開等について、学生・教職員間の共通認識を深めた。ただし、FDについては1回、SDは2回実施しているが、地域課題等の理解を深めるための内容は盛り込まれていない。

表1 日本体育大学社会貢献推進機構構成員(平成26年度)

| 担当 | 氏名 | 役職等 | 備考 |
|--------------|-------|-----------------|--------------|
| 機構長 | 谷釜 了正 | 学長 | 体育学部教授 |
| 副機構長 | 阿部 茂明 | 副学長(企画・管理・運営担当) | 体育学部教授 |
| 連携推進担当 | 具志堅幸司 | 体育学部長 | 体育学部教授 |
| 教育開発担当 | 八木沢 誠 | 学生支援センター長 | 体育学部教授 |
| 研究開発担当 | 中里 浩一 | 総合スポーツ科学研究センター長 | 保健医療学部教授 |
| 体育学部長 | 具志堅幸司 | | 体育学部教授 |
| 児童スポーツ教育学部長 | 久保 健 | | 児童スポーツ教育学部教授 |
| 保健医療学部長 | 平沼 憲治 | | 保健医療学部教授 |
| ベースマネージャー(世) | 後藤 彰 | | 体育学部准教授 |
| ベースマネージャー(健) | 波多腰克晃 | | 体育学部准教授 |

表2 運営戦略会議構成員(平成26年度)

| 役職等 | 氏名 | 備考 |
|----------------|--------|-----------------|
| 機構長 | 谷釜 了正 | 学長 |
| 副機構長 | 阿部 茂明 | 副学長(企画・管理・運営) |
| 副学長(教学・学生生活) | 袴田 大蔵 | |
| 学部長 | 具志堅 幸司 | 体育学部 |
| | 久保 健 | 児童スポーツ教育学部 |
| | 平沼 憲治 | 保健医療学部 |
| 連携推進担当 | 具志堅 幸司 | 体育学部長 |
| 教育開発担当 | 八木沢 誠 | 学生支援センター長 |
| 研究開発担当 | 中里 浩一 | 総合スポーツ科学研究センター長 |
| ベースマネージャー | 後藤 彰 | 東京・世田谷キャンパス |
| | 波多腰 克晃 | 横浜・健志台キャンパス |
| 教務委員会委員長 | 袴田 大蔵 | 副学長(教学・学生生活) |
| 教養教育委員会委員長 | 藤田 主一 | 教養・教職科長 |
| 大学事務局長 | 藤野 雅博 | |
| オフィスディレクター | 白旗 和也 | |
| その他機構長が必要と認めた者 | 荻 浩三 | 学長室長 |
| | 大高 秀二 | 事務局次長 |
| | 森 晴雄 | 健志台統括 |

表3 地域社会連携本部構成員(平成 26 年度) (敬称略)

| 役職等 | 氏名 | 備考 |
|----------------------------|-------|-----------------|
| 世田谷区スポーツ推進担当部スポーツ推進課長 | 進藤 達夫 | |
| 公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団事務局次長 | 末竹 秀隆 | |
| 横浜市民局スポーツ振興部スポーツ振興課長 | 飯田 能弘 | |
| 公益財団法人横浜市体育協会スポーツ振興部長 | 今井 健雄 | |
| 横浜市青葉区総務部区政推進課長 | 室谷 洋一 | |
| 日本体育大学社会貢献推進機構連携推進担当 | 具志堅幸司 | 体育学部長 |
| 日本体育大学社会貢献推進機構教育開発担当 | 八木沢 誠 | 学生支援センター長 |
| 日本体育大学社会貢献推進機構研究開発担当 | 中里 浩一 | 総合スポーツ科学研究センター長 |
| スポーツプロモーション・オフィスオフィスマネージャー | 白旗 和也 | 体育学部教授 |

【エビデンス集・資料編】

1. 日本体育大学社会貢献推進機構規程【No.1】
2. 機構及び会議並びに委員会の構成員一覧【No.2】
3. ライフガイダンスマップ【No.3】
4. クレド及び学生心得&災害対応ブックレット【No.4】
5. 連携協定一覧【No.5】
6. 地域社会連携本部規則【No.6】
7. 運営戦略会議の議事録【No.7】
8. 地域社会連携本部会議の議事録【No.8】
9. 分野別委員会の議事録【No.9】

【自己評価】

建学の精神については、学生、教職員に十分に周知され、これに基づいた事業活動を展開していると言える。組織については、機構の形で全学の各部局等を包含したものとして設置し、運営戦略会議を主体として、三つの分野別委員会(地域教育活動、地域研究活動、地域社会貢献活動)が機能しているとともに、学生の人材バンクを構築して大学全体が社会貢献活動に取り組んでいると言える。スポーツプロモーション・オフィスにおける学生の人材バンクは、地域社会からの要請にタイムリーに対応できる仕組みである。ただし、本来最も社会貢献に関心が高い学生が集まっているはずの保健医療学部学生が登録 0 名というのは大きな課題である。今後、さらなるPR活動等により学生の関心を喚起し登録者の獲得を目指すべきである。また、大学のキャンパスが所在する自治体をはじめ、多方面にわたる団体と連携協定を締結していることは、社会貢献活動に真摯に取り組んでいる姿勢の表れであると評価している。

【改善・向上方策(将来計画)】

教職員が地域課題等を理解した上で、各種の活動に取り組むことが重要であるため、今後、教員はFD、事務職員はSDの中に地域課題に関する内容を盛り込み共通理解を深める必要がある。また、地域課題とその解決策に関するセミナーやワークショップなども積極的に開催すべきである。

基準項目 A 両キャンパス周辺地域住民を巻き込んだ健康維持・増進プログラムの推進

〈テーマ 教育〉

評価のための観点

- (1) 日体大 CSC (Community Sport Coordinator) 養成に向けた取り組みを推進している。
- (2) 地域課題を理解するとともに、社会に貢献するための教育課程が構築されている。
- (3) 各種体育・スポーツ活動の支援を積極的に実施している。

【事実の説明】

- (1) 現時点では、大学独自の資格制度としての案の段階に留まっており、実現に向けた検討もおこなわれていない。
- (2) 学生に地域課題を学習させる授業科目は、三学部とも1年次の「日体大の歴史」1教科のみであり、シラバス上も15週のうちの1コマとなっている。また、社会貢献活動を包含した授業科目も設定されていない。
- (3) 横浜市、世田谷区や小学校等からマラソン大会、総合運動会等の補助役員やスポーツイベントでのパフォーマンス等の依頼に基づき、人材バンクが機能するまでの間、学友会運動部等で調整し、多くの依頼に対応している。ただし、依頼日から実施日まで期間の余裕がない(一週間程度)ケースでは、調整が難しくお断りすることもあった。

表4 体育・スポーツ活動の支援状況(4月～10月)

| 活動内容 | 実施場所 | 参加者 | 実施日 |
|-------------------|-------------------------------|-----|-------------|
| 小中学生のバドミントン教室 | 大田区立矢口東小学校 | 3 | 年間 |
| ドッジボールスポーツ教室 | 目黒区立宮前小学校 | 3 | 年間 |
| 放課後の子ども運動教室 | 目黒区立宮前小学校 | 3 | 年間 |
| 保育園活動補助 | 世田谷区立深沢保育園 | 50 | 平成26年05月30日 |
| 保育園活動補助 | 世田谷区立深沢保育園 社会福祉法人用賀なのはな保育園 | 52 | 平成26年07月04日 |
| 保育園活動補助 | 世田谷区立深沢保育園 | 8 | 平成26年08月01日 |
| ダブルダッチ実演・指導 | 世田谷区立新町保育園 | 5 | 平成26年09月02日 |
| ダブルダッチ実演・指導 | 世田谷区立奥沢西保育園 | 5 | 平成26年09月02日 |
| ダブルダッチ実演・指導 | 世田谷区立深沢保育園 | 5 | 平成26年09月09日 |
| 世田谷区立玉川小学校ファミリーデー | 世田谷区立玉川小学校 | 10 | 平成26年10月04日 |
| 陸上競技教室 | 世田谷区立桜町小学校 | 4 | 平成26年10月08日 |
| オリンピック選手がみんなの先生 | 横浜市港南スポーツセンター | 3 | 平成26年10月19日 |
| バドミントンの指導 | 大田区立調布大塚小学校 | 1 | 年間 |
| 中学校陸上競技大会 | 世田谷区立総合運動場陸上競技場 | 17 | 10月1日 |
| 小学校連合運動会 | 世田谷区立総合運動場陸上競技場 | 58 | 10月21・28日 |

【エビデンス集・資料編】

1. 3学部のカリキュラム【No.10】
2. 授業科目「日体大の歴史」シラバス【No.11】
3. 体育・スポーツ活動支援報告書【No.12】

【自己評価】

現在は、「日体大の歴史」において、15 週のうち 1 コマのみで地域課題が取り上げられている。保健医療学部においては、地域課題に関する内容が盛り込まれてなく、学生が地域課題を理解するには不十分である。大学独自の資格制度 CSC (Community Sport Coordinator) は、本学の社会貢献活動における重要な取り組みのひとつである。しかしながら、現行の体育学部 2013 カリキュラムは、2年目の進行となっており、完成年度を迎える 2016 年度までは、改訂に着手できないこととなっている。また、体育・スポーツ活動の支援は、これまでは、その都度、学部長、学友会運動部部長又は教員個人に依頼し、学生を確保・事前指導を行って派遣することにより、可能な範囲での対応ができていたと言える。なお、児童スポーツ教育学部では、保育園と連携協定を締結し、授業の現場体験という形で園児の体育活動を補助しており、人材育成の観点からも評価できる取り組みである。

【改善・向上方策(将来計画)】

資格制度 CSC (Community Sport Coordinator) については、早急に検討に着手し、2013 カリキュラムの完成年度後に教育課程の改編を行って実現できるよう進める必要がある。当面は、学生に地域課題の理解やその解決に向けた手法等を習得させるため、現行の授業科目や各種のガイダンスを通して対応する等の手当が必要である。また、現在整備中となっている人材バンクについては、有効な活用策を構築して運用することが期待され、外部からの依頼については、早めに依頼していただくようお願いしていく必要がある。

〈テーマ 研究〉

評価のための観点

- (1) 地域住民の体力向上・健康増進に係る研究を推進し、その成果を還元している。
- (2) 地域が抱える各種の課題抽出に向けて取り組んでいる。
- (3) 適切な手段を用いて研究成果を発信している。

【事実の説明】

- (1) }
- (2) } 次年度から取り組む予定となっていることから、研究の内容・研究予算等について、
- (3) } 今年度中に検討して結論を得る必要がある。

今年度の実施はない。

【エビデンス集・資料編】

今回は、資料等無し。

【自己評価】

今年度は、予算の裏付けが実行されていないため、地域に特化した研究活動を実施できていない。しかしながら、体力測定の実施等、研究活動を展開するためのデータ等の収集は行っている。

【改善・向上方策(将来計画)】

運営戦略会議の下に置かれた地域研究活動委員会において、次年度以降の方針及び研

究内容等を検討・決定し、体育・スポーツに係る地域課題の解消に資する研究活動につなげるようにしていくことが必要である。

〈テーマ 社会貢献〉

評価のための観点

- (1) 「する」、「観る」、「支える(育てる)」の各種の取り組みを質的、量的充実を図って推進している。
- (2) 公開講座、体験授業を展開している。
- (3) 安心してスポーツが行える環境整備に努めている。
- (4) キャンパス周辺住民を巻き込んだ多様な取り組みを展開している。

【事実の説明】

- (1) 「する」に関する取り組みとして、体づくり・体力向上に関しては体力測定(公開講座と運動)、健康増進運動教室については太極拳教室を開催した。また、施設開放では、スペシャルオリンピックスや近隣保育園の運動会等に提供している。ただし、スポーツ教室や合同練習、施設管理、施設整備に関する内容は実施できていない。
「観る」に関する取り組みとしては、特に該当する内容は実施できていない。なお、地域住民からは、部活動の見学に関する要望が出されている。
「支える(育てる)」に関する取り組みとして、学校の授業・課外活動支援、幼児教育講座、免許更新講習会、公開講座、体験授業、大会の運営補助、美化運動、防災訓練等を実施している。
- (2) 公開講座は、日体フェスティバル開催時に実施した体力測定に関連して、「体力アップでみんないきいき！」を開催した。また、10月31日現在で25件の体験授業等を実施している。
- (3) (4) キャンパス周辺の美化運動、防災訓練を実施している。防災訓練と体力測定、健康増進運動教室や公開講座は、キャンパス周辺住民を主たる対象として実施している。

表5 防災訓練及び美化運動実施状況

| 実施期日 | 実施内容及び場所 | 実施担当者 | 参加者数 |
|--------------------|---------------------|------------------|-------|
| 平成 26 年 5 月 17 日 | キャンパス周辺の美化(世田谷・健志台) | 学友会 | 79 人 |
| 平成 26 年 6 月 21 日 | キャンパス周辺の美化(世田谷・健志台) | 学友会 | 105 人 |
| 平成 26 年 7 月 5 日 | 岩井海岸(千葉県南房総市)の美化 | 学友会(教職員 2 名含) | 76 人 |
| 平成 26 年 10 月 4・5 日 | 防災訓練(世田谷・健志台) | スポーツプロモーション・オフィス | 68 人 |
| 平成 26 年 10 月 19 日 | キャンパス周辺の美化(世田谷) | 学友会 | 83 人 |

表6 公開講座「体力アップでみんないきいき！」

| 実施期日 | 実施内容 | 実施場所 | 講師 | 受講者数 |
|-------------------|---|--|-------------------------------------|------|
| 平成 26 年 10 月 13 日 | 1.体力測定でわかること 2.遺伝子を活用した競技力向上から体力向上まで 3.体力向上は認知症予防につながる? | 東京世田谷キャンパス 2203 教室 横浜健志台キャンパス 8104 教室 | 須永美歌子 准教授(1) 中里 浩一 教授(2・3) | 20 人 |

表7 第1・2回太極拳教室

| 実施期日 | 実施内容 | 実施場所 | 講師 | 受講者数 |
|-------------------|----------------|--|----------------------|------|
| 平成 26 年 10 月 11 日 | 太極気功、太極拳套路、美顔法 | 東京世田谷キャンパス 5B03 横浜健志台キャンパス 第 2 アリーナ | 武冬 (北京体育大 学教授) | 49 人 |

表8 体験授業実施状況(4月～10月)

| 実施期日 | 高校名 | 出席人数 | 担当教員 |
|------------------|---------------|-------|--|
| 平成 26 年 5 月 15 日 | 県立港北高校(神奈川) | 13 人 | 山田保教授(体育) |
| 平成 26 年 6 月 7 日 | 横浜高校(神奈川) | 39 人 | 櫻井規子助教(体育) |
| 平成 26 年 6 月 9 日 | 東京世田谷キャンパス | 111 人 | 河野徳良准教授(体育)、伊藤譲教授(保医)、石井隆憲教授(保医)、伊藤雅充准教授(児スポ) |
| 平成 26 年 6 月 17 日 | 東京世田谷キャンパス | 210 人 | 野村一路教授(体育)、久保健教授(児スポ)、伊藤譲教授、服部辰広講師(保医)、荻浩三教授(体育) |
| 平成 26 年 6 月 17 日 | 柏日体高校(千葉) | 156 人 | 安達瑞保助教(児スポ) |
| 平成 26 年 6 月 18 日 | 東京世田谷キャンパス | 110 人 | 荒木達雄教授(体育)、齊藤崇(児スポ)、伊藤譲教授、服部辰広講師、小川理郎教授(保医)、野村一路教授(体育) |
| 平成 26 年 6 月 24 日 | 県立横浜南陵高校(神奈川) | 9 人 | 後藤彰准教授(体育) |
| 平成 26 年 7 月 16 日 | 県立久喜高校(埼玉) | 18 人 | 佐野昌行助教(体育) |
| 平成 26 年 7 月 19 日 | 横浜健志台キャンパス | 210 人 | 荻浩三教授(体育)、西條修光教授(児スポ)、伊藤譲教授、小川理郎教授(保医) |
| 平成 26 年 7 月 20 日 | 横浜健志台キャンパス | 186 人 | 荻浩三教授(体育)、森徹教授(児スポ)、伊藤譲教授、朝日茂樹教授(保医) |
| 平成 26 年 7 月 27 日 | 東京世田谷キャンパス | 120 人 | 山田保教授(体育)、奥泉香教授(児スポ)、伊藤譲教授、朝日茂樹教授(保医) |
| 平成 26 年 8 月 16 日 | 東京世田谷キャンパス | 386 人 | 河野徳良准教授(体育)、森嶋昭伸教授(児スポ)、伊藤譲教授、小川理郎教授(保医) |
| 平成 26 年 9 月 21 日 | 横浜健志台キャンパス | 101 人 | 入江一憲教授(体育)、関芽助教(児スポ)、河野徳良准教授(体育)、久保山和彦准教授、朝日茂樹教授(保医) |
| 平成 26 年 10 月 1 日 | 県立川口北高校(埼玉) | 13 人 | 荻浩三教授(体育) |
| 平成 26 年 10 月 2 日 | 県立川越南高校(埼玉) | 13 人 | 荻浩三教授(体育) |

| | | | |
|-------------------|---------------|------|---------------|
| 平成 26 年 10 月 4 日 | 横浜創英高校(神奈川) | 18 人 | 齊藤崇准教授(児スポ) |
| 平成 26 年 10 月 7 日 | 自由が丘学園高校(東京) | 24 人 | 岡本孝信教授(体育) |
| 平成 26 年 10 月 8 日 | 藤村女子高校(東京) | 41 人 | 齊藤崇准教授(児スポ) |
| 平成 26 年 10 月 20 日 | 相模女子高校(神奈川) | 13 人 | 小林正利准教授(体育) |
| 平成 26 年 10 月 29 日 | 県立浦和北高校(埼玉) | 39 人 | 須永美歌子准教授(児スポ) |
| 平成 26 年 10 月 29 日 | 日本大学鶴ヶ丘高校(東京) | 36 人 | 木村直人教授(保医) |
| 平成 26 年 10 月 29 日 | 県立松山高校(埼玉) | 52 人 | 野村一路教授(体育) |
| 平成 26 年 10 月 30 日 | 県立本所高校(東京) | 34 人 | 伊藤雅充准教授(児スポ) |
| 平成 26 年 10 月 30 日 | 県立市川東高校(千葉) | 11 人 | 佐野昌行助教(体育) |
| 平成 26 年 10 月 30 日 | 県立宇都宮南高校(栃木) | 55 人 | 高井秀明助教(体育) |

※体育＝体育学部、児スポ＝児童スポーツ教育学部、保医＝保健医療学部

【エビデンス集・資料編】

1. 防災訓練実施報告書【No.13】
2. 公開講座実施報告書【No.14】
3. 太極拳教室実施報告書【No.15】
4. 体験授業実施記録【No.16】

【自己評価】

初年度としては、可能な範囲での取り組みが実施できている。ただし、計画された地域課題解決に資する取り組みで実施されていない項目が散見され、特に「観る」取り組みのところが対応できていない。体育研究発表実演会が隔年開催ということで、今年度は地方開催のみということも一つの要因であるが、発表会・試合開放・新聞発行・広報誌発行などが未対応となっている。

【改善・向上方策(将来計画)】

特に「観る」に関する取り組みが不十分であり、次年度に開催が予定されている体育研究発表実演会をはじめ、運動部の部活動見学や発表会等への近隣住民の招待などを積極的に推進する必要がある。また、スポーツ教室等については、現在までは高年層者の参加が中心となっており、広範囲の年齢層が参加できる教室を企画立案して実施していくことが必要である。公開講座は、この後、12月7日に「体力測定の活用術」と翌年の2月11日に「あなたの健康と命を守るために」の開催が予定されており、次年度以降は、量的な充実を図る予定である。また、今年度開設された保健医療学部としては、日体フェスティバル開催時などに地域住民を対象としたAEDを用いた救急処置法や、捻挫・打撲などの軽傷時応急処置法の公開講座などを実施すべきである。

基準項目 B 老若男女が積極的に取り組むことのできるスポーツプログラムの構築**〈テーマ 教育〉****評価のための観点**

(1) 学生ボランティアを積極的に派遣している。

【事実の説明】

多岐にわたる依頼に対し、教員・学友会運動部等で調整し、概ねの依頼に対応しているが、ボランティア活動に対し積極的な学生を広く取り込めてはいない。

表9 ボランティア対応一覧

| No. | 実施日 | 実施内容 | 対応学生等 |
|-----|-------------------|----------------------------|--------------|
| 1 | 平成 26 年 05 月 24 日 | 野外活動、ソフトボール、サッカー、縄跳び等指導補助 | 少林寺拳法部 |
| 2 | 平成 26 年 06 月 07 日 | 社会科学見学の引率補助 | 少林寺拳法部 |
| 3 | 平成 26 年 06 月 08 日 | 等々力の家地域合同消防避難訓練補助 | 一般学生 |
| 4 | 平成 26 年 06 月 23 日 | 参加型災害救助訓練 | アメリカンフットボール部 |
| 5 | 平成 26 年 07 月 18 日 | 玉川警察署防災訓練 | アメリカンフットボール部 |
| 6 | 平成 26 年 07 月 18 日 | みどり福祉ホームまつりでのダブルダッチ実演等 | ダブルダッチサークル |
| 7 | 平成 26 年 07 月 22 日 | 深沢中央商店会納涼盆踊り大会 | 深沢寮、和泉寮 |
| 8 | 平成 26 年 07 月 26 日 | 野外活動、ソフトボール等指導補助 | 少林寺拳法部 |
| 9 | 平成 26 年 09 月 06 日 | 小学生低学年と梨狩り及び公園遊び | 少林寺拳法部 |
| 10 | 平成 26 年 10 月 05 日 | こどもまちフェスティバル | 深沢寮 |
| 11 | 10 月～月 1 回 | 働き盛りの男性健康塾 | 教員 |
| 12 | 平成 26 年 10 月 11 日 | 安全、安心まちづくり週間出陣式 | 応援団部 |
| 13 | 平成 26 年 10 月 19 日 | 第 12 回チャリティーウォーク&ランフェスティバル | 少林寺拳法部 |
| 14 | 平成 26 年 10 月 13 日 | 日本体育大学・青葉台東急スクエア共同イベント開催 | 応援団部 |

【エビデンス集・資料編】

1. 社会貢献事業派遣申請書【No.17】
2. 各種ボランティア活動の報告書【No.18】

【自己評価】

対外的には、多くの依頼に対応できていることから、十分に目的を達成していると言える。ただし、運動部等への依頼に頼っていることから、ボランティアを志向する学生に対応しきれていない実態がある。

【改善・向上方策(将来計画)】

現在、人材バンクの体制が構築中となっている。学生との連絡方法等を確立し、学友会運動部等だけでなく、多くの学生が参画できるようにすることが必要である。併せて、ボランティアの有益性を学生に理解させ、積極的に参加するような働きかけを行う必要がある。加えて、参加学生に対する事前・事後指導の徹底も重要である。

〈テーマ 研究〉

評価のための観点

- (1) 幼年～高年に係る各種のデータ収集に努め、効果的なプログラムの策定につなげている。
- (2) 研究活動の成果を開示するとともに、各種の社会貢献活動に還元している。

【事実の説明】

- (1) 今年度は、初年度ということもあって体力測定時のデータ収集のみとなっている。また、参加年齢層が高年層に偏っている取り組みもあるため、各年代を網羅しているとは言い難い実態である。
- (2) 初年度のため、現時点では成果の開示も活動への還元も行っていない。

- ・ 平成 26 年 10 月 31 日(金) }
平成 26 年 11 月 01 日(土) } 東京・世田谷キャンパスで実施。報告書作成中。
平成 26 年 11 月 02 日(日) }
- ・ 平成 26 年 11 月 15 日(土) }
平成 26 年 11 月 16 日(日) } 横浜・健志台キャンパスで実施予定。

【エビデンス集・資料編】

1. 体力測定参加者の年齢別分布表【No.19】

【自己評価】

データ収集が体力測定のみによるものとなっている。今年度については、研究活動が実施できていないこともあるため、成果の開示も活動への還元もできていない。

【改善・向上方策(将来計画)】

効果的なプログラムを策定するためには、体力測定により得られたデータだけでなく、幼年～高年を対象とした各種のデータや各地域の状況等多面的なデータ収集に努める必要がある。

〈テーマ 社会貢献〉

評価のための観点

- (1) 地域課題解決のための活動に積極的に取り組んでいる。
- (2) 老若男女が参画できる多様なプログラムを展開している。

【事実の説明】

- (1) これまで実績のある取り組みを中心とした活動となっており、地域課題解決のための積極性が十分ではなかった。新たな取り組みとして宿泊体験型の防災訓練及び太極拳教室を行っているが、実施内容の決定時期が遅くなり、広報の期間に余裕がなかったため、参加者が少なかった。
- (2) 体力測定、太極拳教室、公開講座等の参加者の年齢層をみると、体力測定以外は高年層に集中しており、老若というにはほど遠いものとなっている。男性、女性の比率は、全体で約 4:6 と良好であると言える。

表10 社会貢献活動の実施状況

| 観点 | 解決する地域課題等 | 活動内容等 | プログラム等 |
|--------------|-----------------------------------|------------------------------------|---|
| する | 実施率向上、子どもの体力向上、施設確保、環境整備、障害者の環境整備 | スポーツ教室 合同練習 | |
| | 子どもの体力向上、高齢者の健康増進 | 体づくり・体力向上・健康増進運動教室 | 体力測定 太極拳教室(2回) |
| | 施設確保、安全管理、情報発信 | 施設開放、施設管理、施設整備 | 保育園の運動会会場 スペシャルオリンピックス |
| 観る | 関心向上、機会充実 | 実演会、発表会、演技披露 | |
| | 関心向上、機会充実 | 練習見学会、試合開放 | 健志台施設見学 |
| | 情報発信、機会充実 | 新聞発行、広報誌配布 | |
| 支える (育てる) | 子どもの体力向上、指導者の確保 | 授業・部活動支援 教員研修会 | ボランティア派遣 免許更新講習会 幼児教育講座 シンポジウム参画 |
| | 指導者の確保、安全管理、障害者の環境整備、障害者の指導者確保 | 公開講座、体験授業、講演、学会 | 公開講座 体験授業 |
| | 機会の充実、施設確保、指導者の確保、ボランティア確保 | 大会開催、大会運営・補助 | ボランティア派遣 人材バンク |
| | 環境整備、安全管理 | 安心してスポーツを行える環境整備(防犯、交通事故防止、美化、託児等) | 防災訓練 美化運動 |

表11 参加年齢層

| 実施内容 | 小学生以下 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代以上 | 合計 |
|------------------|-------|-----|-----|-----|------|------|-------|------|
| 太極拳教室(10/11) | 0人 | 0人 | 0人 | 2人 | 9人 | 16人 | 22人 | 49人 |
| 防災訓練(10/4・5) | 5人 | 0人 | 0人 | 6人 | 15人 | 17人 | 25人 | 68人 |
| 公開講座(10/13) | 0人 | 0人 | 0人 | 0人 | 1人 | 4人 | 15人 | 20人 |
| 体力測定(10/31~11/2) | 138人 | 66人 | 65人 | 55人 | 122人 | 113人 | 119人 | 678人 |
| 太極拳教室(11/2) | 0人 | 0人 | 2人 | 2人 | 15人 | 12人 | 29人 | 60人 |
| 合計 | 143人 | 66人 | 67人 | 65人 | 162人 | 162人 | 210人 | 875人 |

表12 男女比

| 実施内容 | 男性 | 女性 | 合計 |
|------------------|------|------|------|
| 太極拳教室(10/11) | 13人 | 36人 | 49人 |
| 防災訓練(10/4・5) | 42人 | 26人 | 68人 |
| 公開講座(10/13) | 11人 | 9人 | 20人 |
| 体力測定(10/31~11/2) | 222人 | 318人 | 540人 |
| 太極拳教室(11/2) | 17人 | 43人 | 60人 |
| 合計 | 305人 | 432人 | 737人 |

※体力測定では、12歳未満(138人)の男女別は調査していない。

【エビデンス集・資料編】

1. アンケート集計表【No.20】
2. 各種実施要項等【No.21】

【自己評価】

初年度でもあることから、これまで実績がある取り組み中心の活動となっており、地域課題の解決に向けて積極的に取り組んでいるとは言い難い状況である。また、参加年齢層は高年層に集中している取り組みもあり、各年代それぞれが取り組みやすくなるような活動にはなっていない状況である。

【改善・向上方策(将来計画)】

「する」、「観る」、「支える(育てる)」の観点それぞれの地域課題に対応できている取り組みについては、今後、質的・量的充実を図ることを主眼として展開し、特に未対応が多くなっている「観る」の取り組みについては、地域社会貢献活動委員会において、どのような取り組みが可能でかつ効果的であるかを検討し、今後の活動の充実を図るよう進める必要がある。また、参加年齢層が高年層に偏っているのは、実施企画が限られていることにも起因していることから、幼年～高年の広範囲な年齢層の参加者が期待できる多数の企画を立案・実施する必要がある。これを実現していけば、多面的なデータ収集につなげることが期待できる。

A、B両テーマで概ね順調に社会貢献の取り組みが進みつつあるが、今後は、保健医療学部の設置に伴い医療分野での社会貢献の進展が望まれる。

日本の超高齢化社会においては、健康寿命の延長が大きな社会的課題であり、この観点からも保健医療学部が取り組む社会貢献は、地域にとっても日本社会にとっても大きな意義を持つものであり、予防医学に根ざした各種講座の企画と実施が望まれる。